

以下は、父が支那事変で出征し、帰還までに戦地から母宛に送った手紙（昭和13年10月から昭和16年3月まで、おおむね400字詰め原稿用紙2000枚）の中ほどにあり、父が再招集前に勤務していた県立飯田高等女学校などに送ってほしいと、昭和14年5月に母に頼んだ箇所、原稿用紙20枚ほどをワードに書き直したものです。

この箇所は、比較的戦地の状況を短くまとめた形になっておりますが、父が母は一心同体であるとの下、戦地の実際の悲惨な状況なども含めて詳細に記述した母宛ての手紙に比べ、現実描写や当時の軍事機密関係記述はかなり省略あるいは和らげたものになっています。

将校は兵士の手紙を逐次検閲していたようですが、将校は手紙や写真を自由に送ることが出来たようです。旧字体や旧仮名など一部はそのまま、あるいは書き換えました。手書きのため、判読不明な部分等は赤字または??などで示しました。

萩原芳彦（2021年5月）

この便りは、清書の上飯田高女に差向け下さい。もう少し大きな字にして。又之を少し平明にして、横川小学校職員生徒御一同宛に出して下さい。飯田関係の事は引続き、フサコの筆力に依り更に modify して下さい結構です。小学校の生徒向きになほして結構です。とても暇が無くて一々便りを出して居られませんし、特にこんな長い奴は。

母校飯田高等女学校

諸先生、生徒の皆々様に

其の後は、大変ご無沙汰致しましたが、皆様は益々御元気で学務、勉強にお励みの御ことと信じて居ます。母校を離れてより既に一年有事を越え、又故国を後にして早や七か月に垂んとします。銃後の皆様の絶えざる誠心に護られて、僕も其の後数々の戦闘に参加致しましたが、弾傷も受けず元気一杯、今日に至りました。事変が長引くにつれまして皆様のおつとめも並々ならぬことと存じ、戦線の将兵も感謝いたして居ります。

此の前の便りは確か修水河北岸の渡りにあった時に差上げた事と思います。今は其の南方三十里余り、南昌の西南約十里の地点に在り、依然優勢の敵と至近の距離に対峙して居ます。

南昌攻略戦——之は近代兵器のあらゆる力を総合発揮すると共に、我等が最高指揮官の卓越せる深謀秘策を、急襲的に実践する事に依り、予想外の短時日の中に成果を収める事が出来ました。この大規模の攻略の中に活躍した松井部隊の又奥田大隊の行動は、皆様の耳目には殆ど何事も伝えられていない事と信じます。僕の初陣であり、又生涯に絶えて無い体験の一端を茲に御紹介致します。否それよりも何より、我が大隊の為、常に率先陣頭に立たれし部隊長・奥田新九郎少佐殿は、去る四月二十七日遂に壮烈極まりなき名誉の戦死をなさいました。一昨年九月、谷川部隊奥田部隊長として上海上陸以来、武勲赫々たる

名部隊長を失い、将兵一同の哀愁は限りなきものがありますが、今は唯、少しでも広く**攻**  
**国**の皆様に戦死の状況を御報告して、故奥田中佐殿の御冥福を祈ることに致します。

軍は抗日最大の拠点南昌攻略を企図してすでに数ヶ月、我等修水河畔の第一線諸部隊は、徒らに対岸の要塞陣地の強化されゆくを眺めつつ、守備態勢に**腺肉**の嘆きを託しました。然し乍ら其の間に、九江——徳安間南壽鉄道は開通し、着々周到なる準備が実施せられつつあったのです。遂に、時至れり、三月二十日夕刻、修水北岸の我が陣地に砲列を布いた数百の砲門は電撃の如く、一斉に火蓋を切りました。天地を震駭驚倒するあの轟音！対岸にズラリと並んだ・・銃座（トーチカ）は見る見る中に崩れてゆきました。続いて行われる陸海軍飛行機の猛爆撃、又々再興する大砲撃、近代戦史にも斯かる膨大なる砲弾の消費は無かったと云われます。僕らは己が戦闘員の一人である事も忘れ、有頂天になって、この痛快極まり無き戦闘序幕を見物しているのです。然し之は決して砲弾の浪費ではありませんでした。彼の上海戦に於ける肉弾の犠牲の代わりに、銃後国民の力の結晶である科学と物質の巨大なる支出に依って、我が軍は第一難関たる修水河の無血渡河を策し、それに成功したのでありました。

松井部隊は福井部隊に続いて渡りました。三月二十一日午前のことです。修水河は水幅三〇〇米、岸から岸までは六〇〇米もある大きな河です。初めは十五人乗りの鉄舟数十隻を用いて渡河しましたが、夜の引明と共に、工兵必死の作業に依る縦隊橋は既に完成していました。夜通し、対岸の未だ死に切れぬ銃眼からの射撃に悩まされ、暗夜の急流に此の大作業を敢行した工兵の働きに対しては、我々歩兵は心から頭の下がる思いでした。我々は軍旗を先頭にして、頗る安全に渡ることが出来ました。

其のころには何処から集まって来たのか、一群の新聞記者が寄ってたかつてレンズを向けました。僕は此の時の永久に忘れることの出来ない光景を思い出します。それは——橋桁の代わりにをなす鉄舟には、どの鉄舟にも工兵が一人ずつ監視のために乗っていました。前日來の悪戦苦闘で作業に従事した其の工兵たちは今や任務の大半を成し遂げて、茫然と舟に残っている様でした。疲労と睡きの為、どの工兵もあたり前の顔つきではありませんでした。然し其の中の一人の工兵さんは、ズブ濡れのまま睡っていました。しかも任務である支綱はしっかり握ったまま、形もくずさずに深い睡りに陥っていました。この何でもない光景が僕には何時まで経っても消え去ることのない印象として残っています。此の睡り——或いは軍律に触れるかも知れません。にも拘らず何とも云えない神々しいものに見えてなりません。扱て愈々対岸に渡りました。

今迄敵地として睨んだまま、ついぞ踏んだことのない大地を踏みしめることは一つの異常なる**威**興を覚えさせました。砂地でした。三尺もある巨きな鯉や河鱒が岸に打ち上げられています。砲撃の余波を食って飛びあがったものです。我々は未だ何処に危険がかくられて居るかも知れない広い広い砂地を、重い軍装で深い足跡を造り乍ら進みました。突如、ぼーん！大音響、馬の蹄が埋設地雷にかかりました。幸いにして損傷なし。扱て此の砂地

の此処彼処に横たわっていたもの！ 銃をしっかりと握ったまま動かぬ兵士。あゝ、之こそ前線の第一線渡河部隊の尊き犠牲であったのです。

河畔に咲く美しき蓮華の一輪なりとも捧げたい気持ちでしたが、吾々に其の余裕はありませんでした。「お国の為だ構はずに・・・」、僕らはあの唄の言葉の通りに前進せねばなりません。此の頃、敵は既に、皇軍の大挙前進に肝を潰して総退却をしていたのです。退却する敵に対しては、飽く迄追撃の手を弛めず、**仮令**一睡もせず、一食も摂らずとも之を追撃して殲滅すると云うのが、我が日本軍の戦法です。吾々の連続五日間の追撃戦のスタートは此の時に切られたのです。追撃、追撃、追撃、文字通り不眠不休の前進が続きました。

道は細い畦道や低い松山の中を縫っています。吾々は豫て、五日間の食糧を背負っていました。部隊が停まったぞと思って食事を始めようとするや忽ち前の方から「シュッパーツ！」と云う声がかかります。実に閉口しました。斯う云う時には、歩き乍ら食べられる乾パンが一番便利でした。然し乾パンも三度三度食べていると口がパサパサに荒れてしまいました。

余りに追撃急な為に、嘘の様な事実も起こりました。或る兵隊さんが水を汲みにクリークに走ってゆきました。水面が妙に波紋を描いていました。これは大きな魚かと期待して、なおも水面を見つめていると、岸の草かげにぽっかりと、生きている人間の頭が現れたのには、びっくりしたそうです。逃げ切れなかった支那兵の最後の妙案も不成功でした。僕らは此の面白い出来事に寄り集まって、「称来々（ニーライ）！」此の最初の獲物を大声をあげて引き摺り上げました。そして「支那兵は池の中にもいるぞ、これからもよく注意して行け」と部下に広告したものです。

過ぎ行く部落部落には総て、抗日殺敵、人人一条心、殺**？**日本兵とか、肅清**満**奸とか云う鋭い宣伝の大文字に塗られていました。吾々の前進方向は西南に向い、蔡氏と云う処から安義縣城を経て、地理的大迂回をなして南昌に向かったのです。安義城に通ずる軍工路には、敵の大砲がゴロゴロしていました。中には馬をつけたまま、おいてきぼりのものもあります。我が戦車隊の急迫に、よっぽど慌てたものと思われれます。肉体の疲労と睡眠の不足とがなかったなら、之程面白い追撃戦は無かったでせう。

橋のかかっている川を幾度か徒渉致しました。足のマメは水の為にフヤけます。そして其の上に又マメが出来てきました。或る兵隊がこんな事を云っていたのを思い出します。「豆が七つ出来たよ」、「よく算へてるな」、「いや片っ方に七つ分、両方で十四だよ」、こんな会話をし乍ら笑って進むのでした。

不眠不休も、三日目になると少しこたえて来ました。一寸でも停止しますと恐ろしい睡に陥ってしまいます。取わけ夜行軍では、誰一人物云う者もありません。黙々として、足だけに神経があつて歩いて行きます。僕には馬がありました。然し重い軍装でマメの上にマメをこしらへて歩む兵隊のこと事を思うと、どうしても、苦しみを共にせずにはられません。ですから三日間は歩き通しました。四日目の夜、試みに馬に乗りました。

鼻をつままれても判らないと云う真暗闇です。馬の背中におさまると、驚いた事に猛烈な眠気が襲撃して来ました。そして時計の振子の様に、右にフラフラ、左にフラフラ、絶えず揺り動いたと云う事です。其の上、夜の馬の上は非常に寒いのでした。又後からついて来る兵隊に気の毒でなりませんでした。何故なら後から来る兵隊は女中（ショツチュウ）、馬のお尻とごつつんこと衝突許りしていましたから。僕は断然又歩くことに決しました。

そしてそれから後は、他の兵隊さんに負けない位マメを製造してゆきました。馬と兵隊では未だ色々面白い話もありますが、序の一つ——馬のあとから歩くのが好きな兵隊が部下の中にいました。変わった兵隊です。此の兵隊は馬の尻尾をしっかり掴まえているのでした。之は確かに妙案で楽な行軍法であると感じた次第です。

夜行軍の間にこんな出来事も起こりました。担架隊が前進していた時でした。どうも列の中に担架の数が増えているのです。分隊長が点検してみると、見慣れぬ担架兵が列中に加わって黙々と歩いていました。言葉をかけても通じません。能々調べると、それは何時の間に紛れ込んだのか、支那の担架兵でした。「此奴チャンコロだ！」と大騒ぎをした様です。まるで嘘のような話ですが、本当にあったことです。

此の辺りの支那兵は皆正規兵で、服装も日本兵と相当に良く似ています。鉄帽を被つたのも居ます。防毒面も下士官以上は持っています。小銃も銃も、質は劣っていますが、大体日本の同じ様式で、心持小さい丈です。青龍刀など振りまわすのは、今では旧式の支那兵でせう。

そんなわけで、晝間でも五〇〇米以上も離れていると、彼我の識別は困難です。況して上空から協力する飛行機の苦心も大変のようです。それには日の丸を持っているから必ず日本軍とは限らないのです。支那軍も日の丸を用い、或いは白旗をかかげて欺瞞的行動を取ります。支那兵の中にも、なかなか勇敢な奴もそうでないのも居ます。勇敢な奴は最後まで抵抗して、捕えられると笑い乍ら死に就きます。日本刀で首を斬ってくれと切望するのが何人もいました。勇敢でない支那兵は武器を捨てて逃げたり、服を着替えて土民に早変わりしたり、色々の芸当を試みます。斯う云う連中は例の「来々」で呼ぶと、不承不承近寄って来て難なくつかまります。

斯うして捕まえられた支那兵の捕虜を、今でも一人当番の代りに使っています。名前を王（ワン）と云いまして、皆でワンコロ、ワンコロと呼ぶことにしました。口の悪い兵隊はワンコロモチ等とも云って居ます。以前から部隊で使っていて、日本名までヤマグチと与えてやった捕虜は、今度の戦闘の間に行方不明になりました。ワンコロはヤマグチの後任として役立っています。

扱て、土民に早変わりした支那兵を検査するにはどうするか——これも本当にあった事です。何処から見ても服装は土民らしいので決定しかねていた時、或る将校が支那語で「気をつけ」（立正 リツ—）と怒鳴って見ました。するとこの男は、突然両踵をつけて不動の姿勢になったのです。これは正しく支那兵であると決定されました。

然し、戦場に於ける本当の土民は、日支両軍に挟まれて、大迷惑です。昨日までは支那軍にサービスしていた者も、今日は日本軍に従わねばなりません。戸毎に国旗を掲げ「歓迎大日本皇軍」などと云う文字を貼り出します。そして部落部落に、盛大な爆竹の音が起ります。初めての者には、爆竹の音が機関銃の銃声かと思われ、はッと緊張したりします。

大部余談をしましたが序の一つ——チャンコロと云う言葉は、吾々は支那人を軽蔑して使いますが、之は中国人（（チュンクオレン）詰まり支那人）の支那音から来ているのであって、決して英語のChinaとかChineseとは関係の無い言葉です。

扱て大部お話の筋をかき乱しましたが、吾々は追撃・追撃を重ねて五日間、三月二十五日の午前、愈々南昌に肉薄しました。それは西南の方から南昌に襲いかかったのです。こんな方面から日本軍の攻撃を受けようとは、敵が一番考えていなかった事でした。我々自身も初めの中は夢中で進軍していたのですが、此の頃になってやっと、日本軍指揮官の勝れた策略を良く呑み込む事が出来ました。あの五日間の猛追撃と大迂回作戦、其の速度の速かでなければならぬ理由がよく判りました。

側背に日軍の出現を見て、南昌の敵軍は、あの大きな贛江を控えて居たにも拘わらず、城内にいたたまれなくなりました。然し相当の抵抗は致しました。奥田部隊は此処で、南昌攻略戦はじめての犠牲を出しました。極僅かでしたが。石井准尉は僕と三米離れた場所で戦死されました。

この日は天気が頗るよくて、実に痛快な戦闘を経験しました。戦車と飛行機と〇砲の協力の下、立体的な近代戦が展開されました。最後迄、根強く頑張る敵のMG（重機）陣地が一つ残った時です。僕等の身边では、急霰の様に敵弾が注ぎました。「飛行機！頼むぞ！」僕らは心の中で叫んでいたのです。すると低空飛行で、エンジンの唸りの停まった友軍機が、タンタンと敵陣地上を掠めたと思う瞬間、短い鉛筆のような爆弾が投下されました。見事に命中しました。突撃して行きましたら、其処に居た六名許りの敵は一辺に全滅して居りました。

吾々は更に前進を続け、遂に南昌が指呼の間に見える処に参りました。あゝ、此の時の感興！我々は既に南昌を陥落したりと思ふと、云い知れぬ歓喜が全身に漲り渡るのでした。然し此の時既に僕らは糧食の一食も持合せてはいませんでした。数台の飛行機が後から現れました。澄み切った大空に真っ白に咲いた花の様に、パラシュートがぼかりぼかりと開きました。食糧の投下です。どの飛行機からも六個のパラシュートが投下されましたので、空は忽ち、一面に白い花びらで蔽われたようでした。

此の時の光景をカメラに収めなかった事は、本当に惜しい事でした。僕は戦闘間、如何なる場合も、カメラを用意して居り乍ら、遂に此の日の戦闘では写真の事迄は考え及びませんでした。之は実戦に参加するとよく判る事と思います。この戦闘に於いて、最も強く感じたことは、吾々の兵隊の勇敢な事でした。各分隊が余りに前へ前へと出過ぎて困る位でした。或時は友軍の砲弾がまだ射ち終わらない中に突進してしまい、奥田隊長は、これ

を叱咤して、辛うじて引退けた程です。僕もこんなに冷や冷やした事は初めてでした。其の位、面白い戦闘でした。

我が戦車隊は、あの長い中**正**橋を半ば渡りかけた時に、敵の手に依り橋が爆破された事は実に残念でした。然し此処まで戦車が肉薄出来ようとは、実に歩兵と戦車の協同の勝れた成果でありました。支那軍は、軍工路という軍工路は総て、戦車壕で切刻んでしまい（上図参照）、絶対に日本軍を寄せ付けないと信じて居ました。それは其の通りでした。然し彼等とても退却と連絡の用に、唯一本の軍工路は手つけずにおきました。図らずも、日本軍は此の道を選んで南昌に迫ったわけです。日本軍の奇智と、それを実行した努力が如何に大きなものであるかをお判りになったことせう。

三月二十七日の午後、南昌は陥落しました。吾々が誰一人として、斯くも短時日の中に南昌に入城出来ようとは思いませんでした。又生きて此の喜びを味へようと思わなかったでせう。南昌は殆ど荒らされずに、其のまま日本の手に入りました。立派な近代都市の姿を保っています。此処には例の城壁は見受けられません。

扱て南昌入城と共に、南昌攻略戦は終りを告げたのでしょうか。新聞とラジオ以外にたよりの無い内地の皆様には想像もつかない事を、現在の第一線各警備隊は経験して居ります。吾々は疲労を回復する暇も無く、日夜数十倍の敵を相手に戦い続けています。殺しても殺しても切も無く発生する蠅の様に、支那兵程うるさいものはありません。あゝ我等が名部隊長奥田少佐殿は、四月二十七日、〇〇嶺と云う山の頂上で、雲霞の如く群り寄る敵を前に戦闘指揮の最中、遂に恨みの一弾は、鉄帽の真中、星章を貫き、武人として壮烈極りなき戦死を遂げられました。

〇〇嶺こそは、四月二十六日夜半、大隊長殿の率いる我等決死隊を以て夜襲を行い、奇跡的に我が手中に収めることの出来た、第一線陣地中での要点であります。僕らは今、此の要点を死守し、出撃し来る敵に対しては、其の都度、痛撃を加え、南昌外郭の護りに就いて居ます。

未だお話したい事は山ほどありますが、何しろ忙しい戦場の勤務にありますので、残念乍らこの辺でペンを擱くことにします。

行動開始以来五十日は、風呂にも入らず、頭髪も髭も、雑草の如く伸び、良くて野武士か、悪くて山賊の様な姿になりました。然し漸く郵便物、慰問品も到着する様になり、銃後の皆様の御声援に依り、元気百倍致しました。此方は次第に初夏の候と成り、時々は相当の暑さに見舞われ、日中は兵隊さんも、ハダカ、オンパレードと云った状態です。然し、夕景から涼風が水田をわたり始めると、蛍が無数に飛舞うありさまは、美しい風情です。そしていつの間にか思い出は故郷にかへり、伊那の谷間の自然を夢見るのが常です。

諸先生はじめ皆様から誠心こもれる慰問袋やお手紙を戴き、それに対するお礼状も差し上げたか否かも定かではありません。茲に改めて厚く御礼申し上げます。お便り戴く度に、懐しく嬉しく存じ、一々御返事差上げたいのは山々なのですが、日中は公務に追われて其の暇はなく、夜は敵情に関し警戒せねばならず、又そうでなくとも、燈の無い第一線

に於いては、思う様に夜の暇を利用する事が出来ません。今夜は思い切って、取っておきの大蠟燭二本を費やし、此の長い便りを認めました。僕は出征して以来六ヶ月、電燈の光を仰いだことは未だ一度もない次第で、蠟燭のみが唯一貴重の夜の伴侶です。

漢口が陥落したり、南昌が陥ちたと、都会では提灯行列をして祝って下さる様ですが、兵隊は、一体どれ程沢山の蠟燭が消費されるのかと気を揉んだりします。最後に奥田部隊長の事に就て、もっとお話しがしたかったのですが、又の便りに認めませう。唯一、故奥田中佐殿は、部下思ひの最も戦術に卓越せられた武人であった事、吾々は常に慈父と仰いで尊敬惜く能はぬ名部隊長であった事です。三重縣の方で、一時、木曾方面の中学の配属将校として在任せられ、大平峠を越えて飯田の方面に学生を連れて来られたこともあるとかお聞きしました。

どうか生徒である皆様は、益々お身体を大切に、勉強をすすめられ、一人一人が価値のある若き日本の女性として成長されるやうに！ 戦地からの皆様に送る言葉は何時も同じであります。

申遅れましたが、校長先生はじめ、諸先生にも益々御健康と御多幸を祈りあげてやみません。

では又暫く御無沙汰するかも知れません。

さよなら

昭和十四年五月十八日夜半

歩兵中尉 萩原文彦